

ふじのくに芸術祭 2020（第 60 回静岡県芸術祭）文学部門文芸コンクール審査員寸評

<p>【小説】 応募作品は 21 編。昨年より増えました。内容、取り上げられた時代とも多岐にわたっており、豊穡の年と感じました。したがって審査は困難を極めたといえます。歴史を扱った作品の全てに、作者の深い知見が感じられたのが印象的でした。ただ、二十代、三十代の方の応募が皆無だったのは残念なことと感じます。（安田 萱子）</p>
<p>【戯曲・シナリオ】 本年度は、映像用シナリオ 9 本、舞台脚本 6 本、計 15 本の応募があった。ここ 10 年で最多。ステイホームの期間に筆をとった方もおられたらう。内容は漫才の台本ふうのものから歴史に取材したものまで多岐にわたった。完成度にバラつきはあったものの、今後の可能性を大いに予感させた。（近江 木の実）</p>
<p>【児童文学】 応募総数は六作品でした。コロナの流行が関係しているかもしれませんが、この時代によく書いて下さったと思いました。一編、一編が大切な作品でした。そしてそこには創作の着実な成長の跡が見られたのです。子供の心に沿った作品は子供に勇気を与えるでしょう。これらの作品を県民に読んでもらいたいと切望します。（土屋 智宏）</p>
<p>【評論】 五作品とも、重厚で読み応えのある仕事であった。内容の豊かさ、展開の妙に圧倒され、学ぶべき点が多々あった。各作品とも参考文献が多彩であり、その生かし方も味わいがある。勝負どころ、評価のポイントは、いかに＜自分独自の発想＞を論の核にもってこれるか、という点にある。読者も、今回の作品に学んで、新たな挑戦を期待したい。（武士俣 勝司）</p>
<p>【随筆】 コロナ禍のなか、二十編の応募をいただきました。収束が望まれるつつも生きるむずかしさを見聞きする現在です。自らの人生体験を通し、かけがえのない命の貴さに気づく作品が胸を打ちました。熱い文章が作者にも読者にも、新たな心の糧となるよう願っての選考でした。（柴田 真理子）</p>
<p>【散文種目 総合審査】 人間関係（とくに親子や夫婦といった家族関係）の機微に分け入りながら、個人の内面を丁寧に描く作品が揃った。心象の描写や分析が外界の事物とうまく接続しているものには、文芸作品としての厚みを感じられる。コロナ禍においても表現への意欲を持ち続ける方が多かったことに、敬意を表したい。（小関 武史）</p>
<p>【詩】 今年も作品の質は高いものばかりだった。芸術祭賞の作品には、ただの数字と文字にすぎなかったはずの家計簿が七十年かけて醸造され、ダイナミックな詩に変化するという、時間と空間と言語との劇的な化学反応？を体験させてもらった。ほかにもバラエティーに富んだ、素敵な作品たちを楽しんでもらえると、自信を持って言える。（秋 亜綺羅）</p>
<p>【短歌】 応募作品は八十八点。作品のレベルが高く、各賞の線引きに苦慮した。作品のテーマは日常の哀歓であり、十代と九十代の日常が異なるのは当然だが、作品の根底に揺曳する心は別物ではない。だからこそ、私たちは過去の時間を共有することができる。ご高齢の方のゆとり、気概。若い人の繊細な感覚が頼もしく思われた。（君山 宇多子）</p>
<p>【俳句】 俳句部門の今年の応募数は八十九編でした。昨年に比べて一編の増でした。芸術祭六十周年を記念する回であっただけに百編は越えて欲しかった。近年、俳句に関心を持つ人も増えています。コンテストに挑戦することにより、読み込みも深くなり、多くの事を学ぶことができます。自分ごときは禁句。遠慮なくどんどん挑戦し、力をつけて頂きたい。（間島 あきら）</p>
<p>【川柳】 新型コロナウイルスに依り、外出も儘ならず、全日本川柳大会始め、各大会も中止、又は誌上大会へと相成りました。そんな中、県民文芸は六十二遍の応募があり、いずれもレベルが高く、順位をつけるのは苦慮しました。審査する事は自分自身たいへん良い勉強をさせて戴いたと思っております。（佐野 由利子）</p>